

**象潟(さかた)**  
太平洋側の松島と並び評される九十九島の絶景、象潟。しかし松島に比べると太陽と月、ちょっと陰をおびた印象です。芭蕉は象潟を中国の美女、西施(せいし)に例えました。彼女がいるとその国の王は西施に夢中になって国が傾く。そのため彼女は暗殺され水に沈められました。ここ象潟は芭蕉が訪れた約100年後に大地震により一日にして海底が隆起し、島はすべて陸の小山と化してしまいました。当時の面影はありません。



象潟や  
雨に西施が  
ねぶの花

**最上川**  
芭蕉は舟で最上川を下りました。途中、白糸の滝などの景観も堪能。ここで生まれた名句はもともと連歌会の発句として読まれたものですが、当初「すずし」と詠んだ句を奥の細道では「早し」と改めています。実際に川を下った印象で変えたのでしょうか。

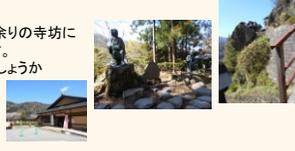


五月雨を  
あつめて早し  
最上川

**出羽三山**  
奥州三大霊場の一つで修験道の聖地。月山・羽黒山・湯殿山はそれぞれ過去・現在・未来を象徴しています。雪の解けた山頂を芭蕉は歩きました。両側に杉の巨木が並ぶ石畳の道はミシュランガイドでも紹介されています。



**山寺(立石寺)**  
岩山に立つ伽藍。往時には三百余りの寺坊に千名あまりが居住、一大聖地です。訪れたのが大型連休中のためでしょうか観光客がものすごく山寺へ続く道は何キロも車列が続いていました。(早期に出かけてよかった)



閑かさや  
岩にしみいる  
蝉の声

**出雲崎**  
佐渡は順徳天皇や世阿弥などの配流の地。本土への思いを天の川に例えた名句。(芭蕉は佐渡へは渡っていません)



荒海や  
佐渡によこたふ  
天の川

**市振**  
日本海側の街道は危険が多い。中には干潮時産漁れない岩肌尾道も。遊女一行に旅の同行を求められたが芭蕉は丁寧に断りました。曾良旅日記に記載がないことから芭蕉の創作だという説もありますが、芭蕉の句は見たものを描いていることが多いし、曾良さんは神道家でもあったので日記(ブログ)に遊女という文字を記載したくなかったのではないだけではないでしょうか



一つ家に  
遊女も寝たり  
萩と月

**大垣**  
旅の最終目的地。奥の味噌道結びの地記念館には奥の細道の行程がわかりやすくパネル展示されています。



(おまけ) **深川**  
俳句の中の俳句といえばこの名句です。この句は奥の細道に旅の句ではありません。東京、深川にある芭蕉記念館には芭蕉の庵跡から掘り出された石の蛙像が展示されています。



古池や  
蛙飛び込む  
水の音

**平泉(中尊寺)**  
平野部が深く切り込んだ奥地、平泉。奥州藤原氏三代が栄華を誇った都。日本で初めて金が採掘された黄金の都も今は中尊寺金色堂にその名残が残るのみ。芭蕉の名句にはそんな哀愁が



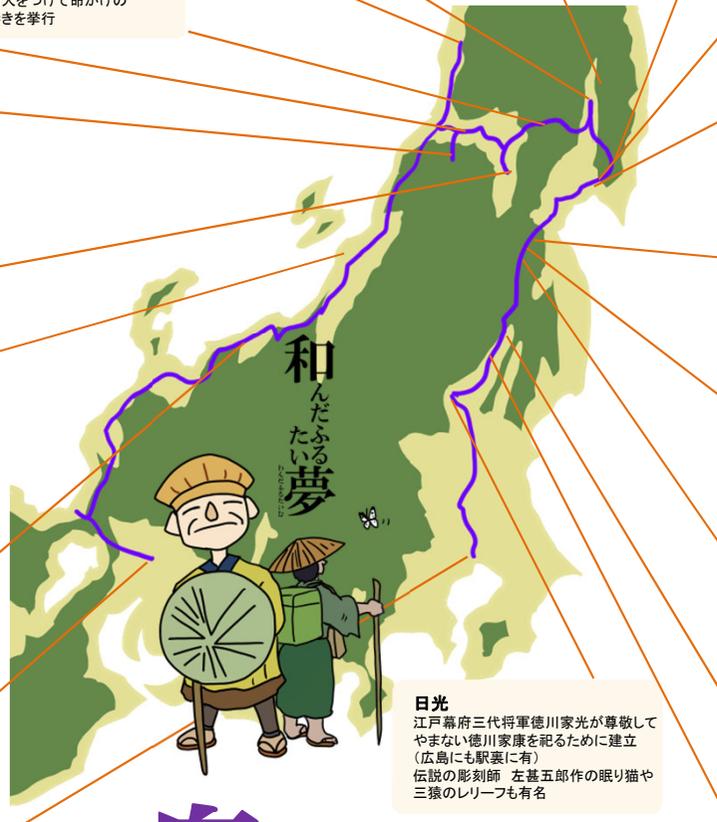
五月雨や  
降り残してや  
光堂

**平泉(義経堂)**  
奥州藤原氏に身を寄せていた源義経。しかし頼朝の圧力に耐えかねた藤原秀衡は父の言葉に反し、義経の屋敷、高殿を襲います。そこで無数の矢を受けて義経を守ったのは武蔵坊弁慶。その地には義経堂が建てられています。しかし義経も妻子を殺害した後、自害して果てます。この句を読むたびになぜか吹き抜ける風を感じます。



夏草や  
兵どもが  
夢の跡

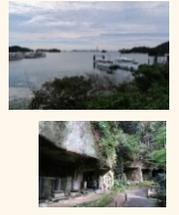
**山刀伐峠(なたぎりとうげ)**  
盗賊がでると噂の峠道。案内人をつけて命かけの山歩きを挙行



**石巻**  
芭蕉は道を間違え石巻に辿り着きます。芭蕉が伊賀出身であることから幕府のスパイ説があります。石巻はかつて伊達政宗が幕府転覆を図りローマ教皇へ使節を送り出した港もあります。本当に迷った!?日山からは石巻の街が一望できます



**松島**  
ここでは芭蕉は句を残していません。あまりに感動し句に残せなかったようです。しかしこの景色を描写した芭蕉の文章表現が素晴らしい!「...鳥々の数を尽くして、そばだつものは天をゆびさし、ふすものは波にはらばふ。あるは二重にかさなり、三重に畳みて、左にわかれ右につらなる。負えるあり抱けるあり、児孫愛すごとし。松の緑こまやかに、枝葉汐風に吹たわめて、屈曲をおのづからためるがごとし。其気色う然として、美人の顔を粧う...」ここでは奇岩ひめく瑞巖寺(今は瑞巖寺)にも訪れています



**多賀城跡**  
かつて蝦夷征伐の前線基地がおかれた地。陸奥一之宮である塩釜神社と現在の仙台中心部の間にあります。地形的にも天然の良港である塩釜神社あたりから兵を出航させていたのでしょうか。芭蕉はここで感激の落涙、句を残せませんでした。



**佐藤庄司が旧跡**  
佐藤兄弟は奥州から源義経に付き従いました。弟は屋島の合戦で義経をかばい矢を受け絶命。兄は自決しました。戻らぬ二人を思う母を不憫に思ったそれぞれの嫁二人が佐藤兄弟の甲冑を身に付けて義母をなぐさめました。芭蕉はその二人の嫁の心に感じ入り、その墓を参りました。

**文智摺観音(もちずりかんのん)**  
この文智摺石(別名、鏡石)には伝承があります。源氏物語の主人公 光源氏のモデルともいわれる源融(とおる)が陸奥の国に赴任していた時、ある姫と恋に落ちました。彼は「必ず帰ってくる」と約束し都へ戻りますが、便りの一つもありません。姫はこの観音に百度詣りをしました。そしてちょうど百度目の日、この石に融の姿が見えました。しかし彼女はそのまま亡くなってしまった。



**黒塚の岩屋**  
自分の仕える姫君の病をすくうためには妊婦に生肝をあてるしかないと言われた乳母、岩手。京の町を出て旅をします。そして福島二本松の岩屋で旅の妊婦と出会うチャンスを待ちます。月日は流れとうとう妊婦が宿をとりました。しかし実はそれは成長した自分の娘だったのです。日本三大鬼女の一つ。歌舞伎や能、神楽などの演目にも登場、安達ヶ原という演目名で呼ばれることもあります。

**白河の関**  
冒頭の中で「...白河の関を越えんとほつ」と、思いをつのらせた芭蕉。白河の関跡には城のような空堀の跡もあります



**殺生石**  
九つの尾を持つ玉藻の前(たまものまえ)。かつて中国やインドで時の権力者に取り入り悪行を尽した傾国の美女の正体は実は九つの尾を持つ狐。彼女は吉備真備の遣唐使船に乗り込み日本にわたると鳥羽上皇に取り入りました。しかし陰陽師に見破られ、那須の地へ。一度は数万の軍勢を追い払うも鏡が池に映る姿で正体を暴かれ退治されました。しかし、死後も殺生石となり、いまだに生き物の命を奪い続けています。芭蕉は彼女の古墳を訪ねました。また弓の名手、那須与一が屋島の合戦で舟の上の扇を射抜いた際に扇掛けをした那須神社へも足を運んでいます。

# 奥の細道が 10倍楽しくなる地図

奥の細道は元禄2年、俳人 松尾芭蕉が河合曾良を伴い、奥州を旅した紀行文です。江戸の深川の家を引き払い、大勢の門徒に見送られながら千住の地を後にし、岐阜県大垣に至る約5か月の旅の記録と折々に詠んだ句を記しています。この旅、多くの観光名所を巡った旅でもあります。旅のルートを見ると街道をそってわざわざ目指した場所が多くあることにも気づきます

歩いた分だけ発見があります。旅先で出会う物語たちは旅を人生を豊かにしてくれます

※この地図は元々は会社の社内報用原稿の参考資料として書いたものです

そぞろ神の招きに会いて、旅に出かけませんか